

2016 年 1 月 16 日 (土)  
富山県民会館 401 号室  
14:00～15:30

## 「立山・黒部の山岳遺跡調査から」

富山県埋蔵文化財センター所長代理  
島田 修一 氏

### 1. 立山の自然と歴史

立山連峰の景観は、20 万～22 万年前に始まった火山活動と、その後の造山運動を通じて形成されたものである。一帯には地獄谷、立山カルデラや称名滝など雄大で美しく、かつ多様で特異な景観が広がる。最近、日本初の氷河が発見され、また、弥陀ヶ原・大日平がラムサール条約登録湿地となるなど国際的にも評価されている。ただ、ここ 2～3 年は火山活動が活発化し、地獄谷一帯では噴煙が上がり続けている。



立山連峰に初めて人間が足を踏み入れた証拠としては、昭和 29 年に天狗平で発見された縄文時代（約 4000 年前）の石鏃（石で製作した矢じり）がある。美女平や弥陀ヶ原などでも縄文土器や石鏃が採集されたと伝えられるが、現在どこにあるか分からず、詳細は不明である。これらは縄文人が獲物を追って高山域まで入り込んでいた証であろう。縄文時代は今より平均気温が 2℃くらい高く、当時の立山は今より雪が少なかったと考えられる。縄文時代には、甲斐駒ヶ岳や日光男体山などの高山域でも縄文土器や石器が採集されているが、弥生時代や古墳時代の遺跡や遺物が高山域で発見されたという例を、寡聞にして私は知らない。その理由として、弥生時代以降は狩猟・採集社会から農耕社会へという文化的な変化とする説が主流である。

立山が初めて文献・記録に現れるのは、越中国司として赴任した大伴家持が『万葉集』に詠んだ「立山賦」である。その代表的な一句が「立山に 降りおける雪を 常夏に見れども飽かず 神からならし」である。この立山（万葉仮名で、「たちやま」である）が、これが現在の「立山」かどうかについては諸説がある。富山湾側から一番見やすい毛勝三山、すなわち毛勝山、釜谷山、猫又山ではないかという説もあるし、富山湾側からひととき目立つ劔岳であるという説もあるが、私自身は、立山連峰全体を指して「たちやま」と呼んだという考え方が今のところ一番納得できる。

いずれにせよ、この頃には、山そのものが神であり、山への畏敬の念は感じられるものの、立山に対する仏教的な世界観はまだみられない。

立山は大宝元年（西暦 701 年）に開山されたと縁起は伝えるが、これについても諸説がある。最も古い史料は鎌倉時代に編さんされた『伊呂波字類抄』であり、越中国司として赴任した佐伯有若による開山と伝える。一方、江戸時代の『和漢三才図絵』では有若の子

であった佐伯有頼が開山したとする。現在、文献史学の研究者間では後者の説が有力である。いずれにせよ、平安時代の『今昔物語集』には「立山地獄」が紹介されており、映画や小説で有名な『劔岳 点の記』でも取り上げられたように、大日岳や劔岳の山頂から平安時代の錫杖頭が発見されていること、雄山、室堂でも 10 世紀初めの焼き物が採集されていることなどから、少なくとも、平安時代、9 世紀末から 10 世紀の初めには立山が仏教的に開山されていたことは明らかである。

立山と同様に、石川県の白山にも少し後の養老年間に泰澄によって開山されたという伝承がある。日本各地の霊山の多くが 8 世紀後半から 9 世紀に開山されたという伝承を持つが、こうした伝承の背景には中央政府の意向が働いているという説がある。山の開山には国家による鉱山資源などの掌握、採掘、支配といった意味もあるので、その意を受けた修験者たちが各地の開山に関わったのではないかという考えであるが、物証的には難しい。

## 2. 立山信仰の世界

立山は、仏教の広がりとともに、平安時代の後半には神の山から神仏習合の山岳信仰の山に姿を変える。本地垂迹説に基づき平安時代から中世へかけて仏教が発展していく中で、当初は劔岳や大日岳の方に信仰の中心があったと考えられる。当時は修験者が険しい山に登って回峰や山ごもりをして修行を積んでいた。その後、平安時代の終わりから鎌倉時代にかけて浄土信仰が普及すると、立山信仰も修験道と浄土信仰が複合した形に変化していく。これに伴って劔岳・大日岳から立山（雄山）、別山、浄土山へと信仰の対象が移っていったようである。室堂平には「立山開山縁起」に関わる玉殿窟や虚空蔵窟という石窟があるが、これらが信仰の場の中心となった。

鎌倉時代以降は、宿坊などの宗教施設や宗徒の組織が充実し、岩嶽寺、芦嶽寺といった宗教村落が発展していく。守護や地頭の厚い庇護を受けてそれらの集落が力をつけていき活動が活発化し、それを反映してか山中には懸仏、鏡といった宗教遺物が増加している。

江戸時代になると、加賀藩の崇高を受けた岩嶽寺・芦嶽寺宗徒が立山信仰の全国的な布教を開始する。これは『立山曼荼羅』や神仏像の出開帳などによって、一般庶民に立山登拝をして救いの道を開くことを促すものであった。また、全国の多くの山には女人禁制という思想があるが、芦嶽寺では「布橋灌頂会」という女人救済の儀式が成立し、女性にも広く参集を呼びかけた。山麓では一層、宿坊の整備が進んだ。また、山中でも「立山温泉」や室堂の山小屋などのインフラが整備されたので、江戸時代の後期（文化・文政年間）には最盛期を迎え、一夏 6000 人以上の人が立山を訪れたという記録がある。この立山参詣の旅には多くの日数と経費を要し、現代の貨幣価値に換算すると一人あたり 15 万円から 20 万円の費用がかかったようで、当時の人々にとっては修行というよりお伊勢参りと同じように、生涯の中でも非日常に身を置くことができ高価で貴重な旅だったことであろう。

宗徒が全国に布教するときに用いた立山曼荼羅には、堂社や立山地獄が描かれた上方に神仏が住む天上界の様子が描かれ、立山には地獄と極楽の両方がある、ここで身を清めてお参りすれば罪が悔い改められ極楽に往生できると布教していた様子が見て取れる。

江戸時代に最盛期を迎えた立山信仰だが、明治時代には廃藩置県、廃仏毀釈の動きが日

本中に吹き荒れ、仏教的な信仰登山は廃絶し、「布橋滝頂会」も全く行われなくなっていった。信仰登山に代わって外国人や冒険家による近代的な登山が盛んになるにつれ、「仲語」と呼ばれて神様と人間の間を橋渡しする人とされていた衆徒は、神職や山岳ガイドに転身していくことになる。一方で「おんば様のお召し替え」などに見られるように立山信仰はかたちを変えながら地域の中で根強く生き続けた。

### 3. 立山・黒部山岳遺跡調査事業

立山・黒部山岳遺跡調査は、世界文化遺産登録の推進を目途に立ち上げたもので、今年で6年になる。世界文化遺産登録は現在、「立山砂防」を核とし、知事を先頭に大変熱心な取り組みが進められているところであるが、提案当初は立山信仰と砂防施設、発電施設の資産の三つが大きな柱となっていた。富山県埋蔵文化財センターでは、立山信仰を中心に調査を進めてきた。調査の目的は立山信仰に関わる文化的な資産の所在地、内容、保存状況の実態を把握することである。立山信仰に関する主な考古学的な現地調査は、昭和 35 年以降、7 回実施されている。一番多く記録が残っているのは昭和 35 年から 37 年の調査だが、写真が鮮明でなく図面もスケッチのような状態で地図も正確ではない。遺跡や遺物があるのは分かっているが、それがどこの何なのかということがよく分からなかった。このため実際に現地に行ききちんと写真や図面に収めることに力を注ぐとともに、併せて文献資料の整理も行っている。

### 4. 今回の調査の概要

現地調査は平成 22 年度からの 5 箇年で、立山連峰の北は僧ヶ岳から南は薬師岳までの山頂すべてを調査対象とした。さらに、黒部峡谷や立山カルデラ、早月川の上流域を含む一帯を踏査して、山岳信仰遺跡の所在の有無などの確認を行った。

平成 22 年度は、①別山山頂周辺の分布調査、②山頂の地形と石積み遺構の測量図の作成、③立山温泉跡の庭園部分の測量図の作成などを行った。

『立山曼荼羅』では、別山に祠が建っている。今は北峰山頂に祠があり、この祠は雄山の峰本社の建て替えの際に大汝山に移されていた仮宮を、平成 10 年に遷座したものである。昔から雄山と大汝山と富士ノ折立が立山本峰といわれており、別山はそれとは「別の山」との意味。当時、剣岳は登ってはいけない山といわれ、ここ（別山）から遙拝する山となっていた。山頂の硯ヶ池は日本で 3 番目に高いといわれる高山の池で、この周辺で 100 点以上の遺物が採集できた。その一部を紹介すると、平安時代の須恵器の破片、鎌倉・室町時代の珠洲焼という能登で焼かれた壺、八尾焼の破片、江戸時代の和釘、建造物の飾り金具と思われる金属製品である。

平成 23 年度は、①大日岳：七福園の地形と岩屋の測量図の作成、②剣岳：長次郎谷の分布調査、③室堂：玉殿窟の前庭部の発掘調査などを行った。

大日岳東側に広がる七福園は中大日岳の東側にあるなだらかな平地で、露頭した白い花崗岩の巨岩とハイマツやナナカマドの緑が庭園のような美しい場所であるが、昔から修行の場として使われたという伝承が残っている。昭和 35 年の調査でも修験者が修行した岩屋、

たき火の跡、平安時代の遺物が採集されているが、今回、新たに 2 箇所 of 岩屋を確認した。玉殿窟は、佐伯有若もしくは有頼が阿弥陀如来と不動明王から開山のお告げを受けたといわれる聖地である。何度も調査が行われているが、今回、富山大学の学生の協力を得て窟の前庭部を 50cm ほど掘ってみたところ、江戸時代の古銭や金属銭、懸仏と思われる破片、鎌倉・室町時代の珠洲焼の破片や土師器が出土し、修験者や参拝者の活動の痕跡が色濃く認められた。また人骨と思われる焼骨も認められ、現在これを年代測定している。

平成 24 年度は、①毛勝三山の分布調査、②仙人岩屋の調査、③大汝山山頂の地形と祠跡の測量図の作成、④池ノ平で小黒部鉱山の坑道、鉱山道の確認などを行った。

釜谷山の上には何もなかったが、猫又山、毛勝山の山頂で、いずれも江戸時代後期の作と考えられる地蔵石仏を確認したが、この 2 体の地蔵石仏のほかに遺物は全く認められなかった。もしここが大伴家持の「たちやま…」と詠んだ山だとすれば、信仰の対象として奈良時代以降の遺物が 1 点や 2 点散在していても良いように思われるが、全く見当たらないこと、また、江戸時代の信仰登山ルートから外れていることから、少なくとも江戸時代以前にはこの山は信仰の対象とされていなかったと考えられる。この 2 体の地蔵石仏はともに台座を欠くことから、おそらく明治以降に他の場所から当地へ奉納されたものと思われる。劔岳の北東、黒部峡谷の支流、仙人谷にある仙人岩屋には、室町時代の形態的な特徴を持つ阿弥陀仏が安置されている。平成 10 年に一部発掘調査がなされているが、中世や江戸時代にさかのぼるような痕跡は一切見つかっていない。この阿弥陀仏像は、石龕仏(せきがんぶつ)という平面的な仏像であり、明治以降にどこか他の場所から外して当地へ持ち込まれ、安置されたものと思われる。

ザラ峠は、佐々成政の「さらさら越え」で有名な立山の裏側から現在の長野県大町市へ抜ける道で、江戸時代には一般人が入ることは許されていなかった。その尾根筋を通る道のすぐ下に道跡を確認した。これが「立山新道」(越信新道)で、江戸時代以前に使われていた立山の裏参道を改修して明治時代初めにつくられた道である。今は崩れてうっすら痕跡がある程度である。弥陀ヶ原の北西、獅子ヶ鼻は立山信仰登山の名所の一であり、中腹の弘法窟には弘法大師の木像が安置されていて文政年間の銘記がある。下段には役行者像や不動明王像のある岩屋がある。今回の調査では窟の正確な位置や像の大きさなどを計測した。

平成 25 年の調査では、①千寿ヶ原から室堂、雄山山頂に至る旧登拝道の道筋の確認、②山崎カール、立山カルデラの分布調査、③劔岳、薬師岳山頂部の分布調査、④浄土山の測量図の作成、⑤室堂平：玉殿窟、納骨遺跡等の測量図の作成などを行った。

旧登拝道の調査では、材木坂の岩場を過ぎ美女平のすぐ下の辺りの所に幹周り 5m はある杉の大木がある。偶然、それに寄り掛かるように休憩して足下を見たところ、首のところまで埋まった地蔵石仏を発見した。掘り出してみると本当にきれいな地蔵石仏で、光背部には寄進者の金沢の商人など 6 名の名前が刻まれていた。後日、この石仏は昭和 35 年の調査でも確認されていたことが分かったが、調査後に位置が分からなくなったのか報告書には記載されていない。その意味でもたいへん貴重な発見となった。

また弥陀ヶ原一帯の旧登拝道の調査では 50 年以上も所在が不明となっていた信仰登山

の名所「姥石」を発見した。弥陀ヶ原の登拝道には「一ノ谷道」と「姥ヶ懐道（うばがふところみち）」の2つがある。一ノ谷の道は登山道、姥ヶ懐道は下山道として利用された道である。明治以降いずれも廃道となっており、笹藪が生い茂る中を突き進みながら、昭和35年調査時のスケッチを頼りに「姥石」の探索を続けた。美女平と同様、途中偶然に休憩した所がまさにその場所であり、2m以上もある巨岩の凹みに、スケッチとまったく同じような状態で地蔵石仏が据えられているのを発見した。後日、再調査に出向き石仏の写真撮影や拓本を取ったところ、光背に「天明三年六月二十四日、右うばいし道」と彫られていた。しかし、「姥石」がある場所は分岐点ではないので、もともとここにあった石仏ではなく、「うばいし」の文字が彫られていたことから、後世にこの場所へ運ばれ、凹みに据えられたものと思われる。

現在、室堂から一ノ越、雄山山頂に向かう石敷きの登山道が整備されているが、その60～120m北側に江戸時代の登拝道跡が残っている。その道筋で平成5年に西国33所第33番石仏が発見されている。賽の河原社地にあった六地蔵は、現在、少し離れた雷鳥平から一ノ越へ向かう道筋に移されていた。立山に登る方はよくご存知の「祓堂」は、神仏が住まう世界と下界を分ける結界の場所である。かつてはこの近くの沢で身を清めてから、草履などを全部脱いでお祓いを受け、山頂へ向かったといわれる。ここから先は、三ノ越や五ノ越などの現在の登山ルートと同じ所に祠が残っている。祠の周囲には雄山神社の社地を示す杭が打ち込まれている。五ノ越社は現在の雄山神社社務所にあたるが、祠は峰本社への登り口へ移されている。

山崎カールは、日本の最初の氷河地形として見つかった場所である。ここには江戸時代に何度も建て替えられた峰本社の柱材や釘を打った板材などが数多く廃棄されていた。浄土山社地は石積みで囲った以外には祠も何もないが、西側には阿弥陀堂と呼ばれる場所がある。石垣が残っているが、さほど古いものではないと思われる。

劔岳の調査では、劔沢から別山尾根を通り山頂に至るルートを踏査した。途中には昭和期の避難小屋などはあるものの、信仰に関わるものは皆無と言っていい。劔岳はもともと登ってはいけない山と捉えられていたため、山頂に社が造られたのは記録では明治以降だったと言われている。明治40年に柴崎測量隊によって錫杖頭が発見されたという場所は、記録では劔岳の絶頂と記載されているが、山頂部の地形改変が著しく、発見場所がどこかについては、結局、特定できなかった。ただ、山頂の西側で、そうした法具を埋納した修験者が修行、山ごもりしたと思われる堅穴状の岩屋を確認できた。

平成26年の調査では、①地獄谷での雄山神社末社地の所在確認、同定、②雄山から別山、賽の河原、玉殿窟へ至る旧登拝道の道筋の確認、③劔岳山頂の詳細地形測量などを行った。

火山ガスの影響で現在立ち入りが禁止されている地獄谷へは、環境省の許可を得て立山自然保護官事務所に同行いただき調査を行った。ここでも雄山神社の末社地を確認することができた。地獄谷の西側には伽羅陀山がある。地獄から衆生を救うお地蔵菩薩が住む山とされ、そこには炎高山社が所在する。今はコンクリートの御堂が建っているが、昭和35年頃までは木製の祠があったことが知られている。堂内には、鎌倉・室町時代の五輪塔、焼き物などが残っている。江戸時代の立山参詣には、雄山までのコースと浄土山、雄山、

別山の三山を巡るコースがあり、立山曼荼羅には後者のコースの名所「大走り、小走り」が描かれている。急斜面を走ったような状態で降りてくる様子からこの名前が付いたという。今回の調査でその道筋を確認できた。真砂岳と富士ノ折立の間にある分岐点には頭のない不動明王が置いてある。いつ頃この場所に置かれたかは不明であるが、昭和 40 年頃までは室堂にあった。おそらく大走りへの分岐点を示す道標として移されたものであろう。

## 5. まとめと今後の活用

5 箇年の調査を通して、古文書や立山曼荼羅に描かれ、その存在は知られていたものの、これまで実態が不明であった立山登拝道（禅定道）の道筋や名所・旧跡の位置や保存状況が確認でき、山上での立山信仰の範囲・内容などを明らかにすることができた。とりわけ、50 年以上行方知れずであった「姥石」を発見することができたこと、「大走り・小走り」の道筋を特定できたことは大きな調査成果の一つである。

また、立山山上における平安時代から江戸時代の立山信仰に関わる施設や遺物の詳細な記録が作成できたことで、立山信仰の成立や変遷、発展の様子を探る上で貴重な基礎資料を得ることができた。

調査成果を踏まえた立山信仰の特徴として、①地方の霊山としては国内の山岳信仰遺跡の中でも有数の古い時期に成立した。②自然が造り上げた特異な火山景観を上手く活用して「地獄」「極楽」を創出し、立山曼荼羅の世界を具現化（現実生の確保）③一般庶民による登拝を推進するために登山ルートや宿坊、名所・旧跡などのインフラを積極的に整備したことが挙げられる。

現地調査は終了したが、今年度末までに調査成果をとりまとめ報告書を刊行する。また、来年度以降に展示会の開催や、図録・ガイドブックの作成、広報誌やインターネットによる情報発信などを通して、一般の皆さんに貴重な調査成果の公開・活用を図っていきたい。併せて、遺跡の保存・管理計画の作成など国の文化財指定に向けての調整も進めていかなければならないと考えている。